

授業科目 運動病態学

【担当教員名】 高木昭輝	対象学年	2 年	対象学科	理学療法学科
	開講時期	後期	必修・選択	必修
	単位数	2 年	時間数	3 0 時間

【＜概要＞又は＜一般目標：G I O＞】

運動系の障害や感覚系の障害および両者の障害などで、現在それらの障害の分析や治療の糸口をみつけることが困難な場合が多い。それを解決するために様々な側面から考察し、治療へと結び付けていくことを学ぶ。

【＜学習目標＞又は＜行動目標：S B O＞】

- 1 運動病態学の概念を言うことができる。
- 2 運動病態学から機能障害学への関係を説明することができる。
- 3 運動病態学が対象とする現象の具体的な例を挙げることができる。
- 4 運動のシステムと感覚のシステムの関係を説明することができる。
- 5 運動系の神経機構と感覚系の神経機構および両者の関連を説明することができる。
- 6 CVAにおける運動病態を観察することができる。
- 7 SCD、Parkinson diseaseにおける運動病態を観察することができる。
- 8 その他の疾患や症候群においてニュートン力学で解析出来にくい現象を運動病態学として考えることができる。
- 9 上記について機能障害回復学への連携を検討することができる。（観察から問題点の推察、さらに問題解決へと考えを進める。）

回数	授業計画又は学習の主題	SBO	
		番号	学習方法・学習課題又は備考・担当教員
1	運動病態学について オリエンテーション	1	高木 講義
2	運動病態学から機能障害回復学へ	2	高木 講義
3	運動病態学の対象例 1	3	高木 講義
4	運動病態学の対象例 2	3	高木 講義
5	運動系と感覚系のシステムとその関係 1	4, 5	高木 講義
6	運動系と感覚系のシステムとその関係 2	4, 5	高木 講義
7	運動系と感覚系のシステムとその関係 3	4, 5	高木 講義
8	CVAに見ることができるさまざまな運動病態 1	6	高木 講義
9	CVAに見ることができるさまざまな運動病態 2	6	高木 講義
10	SCD、Parkinson diseaseにおける運動病態 1	7	高木 講義
11	SCD、Parkinson diseaseにおける運動病態 2	7	高木 講義
12	その他の疾患や症候群においてニュートン力学で解析出来にくい現象 1	8	高木 講義
13	その他の疾患や症候群においてニュートン力学で解析出来にくい現象 2	8	高木 講義
14	まとめ	1～8	高木 講義

【使用図書】	＜書名＞	＜著者名＞	＜発行所＞	＜発行年・価格・その他＞
教科書 (必ず購入する書籍)	神経学的理学療法—問題点と解決法のポイント— 真野行生（翻訳） 医歯薬出版			
参考書	多重感覚刺激法（図書館にあります）			
その他の資料	高木が作成し配布する。ビデオを使用する。			
【評価方法】 出席、授業貢献度 (質問や意見など発言回数)		【履修上の留意点】 神経系理学療法学を自分で読了し、質問や意見を求めること。		